

〈座談会〉

# “朝鮮半島型解決”は可能か

「ベトナム人民の勝利」ではアメリカの北ベトナムに対する戦後復興援助は説明できない



かみ や ぶ じ  
神 谷 不 二

慶応義塾大学教授



なか じま みね お  
中 嶋 嶺 雄

東京外国語大学助教授



ちゅう やま みち お  
蠟 山 道 雄

上智大学教授

本誌 一月の二十七日にパリでベトナム停戦協定が調印されいろいろな意味で世界に大きな波紋をなげかけました。しかしそれをめぐる日本国内の議論は「ベトナム人民の勝利」をはじめとして、どちらが勝ったか負けたかというふうなやや単純かつ軍事的にすぎる議論が多いように思います。したがって、今日は三先生にこの戦争および停戦の高度に政治的な性格を説明するようなお話をしたいだければと思います。

### 最盛期すてに米中ソの合意

神谷 ベトナム戦争は、いわば典型的な現代の国際内戦で、勝ったとか負けたとかいう単純なものさしを評価の基準にするということは、本来成り立つはずがないと思うんですね。もう少し詳しくいえば、国際内戦というのは、内戦と国際政治との複合体だということができるわけですね。しかも内戦のほうか、国際政治かといえは、これは国際政治のほうに比重があると思うんですね。たとえば、この戦争は解放戦線を北側にくつつけて考えれば、南北のベトナムの間で戦われたわけですが、それでも、北ベトナムにしろ南ベトナムにしろ、それぞれ単独にあれだけの戦争を戦う能

力があつたかといえは、もともとなかったわけ、そもそも内戦を可能ならしめたのは、国際政治のほうですからね。

したがって、終わらせる場合にも、どうしても国際政治のほうがいニシアチブをとって終わらせるといことになるから、あんなに時間がかかるわけですね。ニクソンの代になつてからでも四年あまり、キッシンジャーがベトナム戦争の終結に手をつけた時期はジョンソンの末期ですから、それから考えれば五年以上かかっているわけですね。

この戦争を見ておきますとアメリカを含めて、いわば冷戦の現実を、この戦争を通じて大なり小なりよく理解するようになっていくと思うんですね。しかし、例外的に日本だけが、停戦協定成立を迎えて多分に心情的なベトナム人民の勝利あるいはその裏返しのような意見に見られるようにリアリティから遠ざかるような態度が感じられます。そうなりますと、現実とのギャップは当然いままです。以上で開くわけで、今後ますます日本を取り巻く国際環境は複雑かつ流動的になってくる際に、そういうギャップが広がってくるのは、たいへん気になるという感想です。

さっきいった国際政治的な文脈でこの停戦

をみますとソ連についていえば、六七年の四月に、ベトナム戦争がいまや最盛期にかかろうとしたときに、核拡散防止条約の米ソ共同原案ができたのが、何よりも一番象徴的だと思うんですね。その後紆余曲折はありましたが、基本的には、ベトナム戦争を米ソの大きな対立にはしないという点については合意ができた。だから、アメリカがハノイ、ハイフォン爆撃や機雷封鎖までやっても、ニクソンを去年の五月にモスコウへ迎えたのは必然的だったと思うんですね。

中国については、ワルシャワの大使級会議を通じてでしょうけれども、ベトナム戦争が地上軍の北ベトナム進入という形で北ベトナムへ波及したり、まして米中戦争に拡大したりするということはもうあり得ないというメドをつけて文革をやった。あの時点で米ソ間と似たような共通の理解が基本的にはできたというふうに思うわけですね。

そういう形で米ソ・米中間、つまりは米中ソ三国間に、ベトナム戦争をそれぞれの国のグランド・ストラテジーの基本にかかわる問題だとは考えない。逆にいえば、ローカライズするというところで合意が成立した。そうになると、もうあとはテクニカルな処理でし



たね。このテクニカルな処理なるものが、いろいろたてまえばあり、そうストリートに本音のほうを出せないから、いろいろ手間がかかったんでしょけどね。基本的にはそれが停戦をもたらした一番のポイントじゃなかったか、というふうに私は見ますね。

### 効果のあった北爆

蠟山 ぼくもほぼ神谷さんと同じ考え方です。最近における典型的な内戦、つまり国際化しない内戦はナイジェリア、ビアフラですね。あのときは簡単に決着ついちゃったでしょう。完全な内戦といえないが、加担した国際的勢力が、米ソレベルでない場合は、パングラディッシュですが、これも簡単に決着がつくわけです。だから、ベトナム戦争は、内戦であつたものが、冷戦的文脈の中で国際化して、それが冷戦の激化するところからずっと続いているために、始末をつけるのにこれだけかかった、というわけです。

ぼくは最近介入していったときのアメリカの考え方というのは、わからないわけじゃないわけです。しかし結果的に見ると、やっぱり誤認があつたという気がする。アメリカ自身も誤認があつたことはわかつたけれど

も、手を抜くまでにはものすごく時間がかかったということでしょうね。だから、勝ったか負けたかという議論はつまらない議論なわけです。

アメリカについてみれば最初の介入の目標が達せられたかという点から考えると、やはり成功したとはいえない。しかしニクソン政権登場のスローガンはベトナム戦争終結、つまりアメリカが軍事的に手を抜くということですよ。さつき神谷さんが、ジョンソン時代の末期からキッシンジャーが手を染めたといわれたがそのころ彼が書いた『フォーリン・アフェアーズ』の論文を見ると、彼の眼目は政治的解決の問題と、軍事的解決の問題を分離する。そして、とにかくアメリカは北ベトナムとの間に軍事的に合意に達して手を引き、政治的将来は、南の二つの勢力同士にまかせるといふことだったわけで、この観点から見れば、成功したということがいえると思うんですね。それを成功させるために、さつき神谷さんのいわれたような、ソビエトとアメリカの関係、中国とアメリカとの関係、並びにソビエトと中国との関係をフルに利用した。

昨年の五月の初めに始まった、機雷封鎖、

北爆の強化は、とんでもないことだとあの当時いわれたけれども、あの五月八日のニクソンの声明の直後のある新聞の座談会でも言ったことですが、どうも北ベトナムが国際情勢を誤認していたんじゃないだろうか。つまり北ベトナムが、結局ソビエトと中国との援助なしにはあれだけの戦争はできなかったということを、徹底的に認識していなかったんじゃないかと思うんです。

アメリカは、ソビエトと中国との特殊に考慮しなければならぬ問題を突きつけて、北ベトナムに対する援助を非実質化した。だから北京訪問とモスクワ訪問というのは、直接北ベトナムに対して戦争をやめなさいというふうには北京とモスコにいわせることではなくて、むしろ北ベトナムを心理的に中ソから切り離してしまうということをねらったものであつたんだろうとぼくは思うんですね。

つまり、いままではへたに北爆すれば、完全な了解のない場合に、中国はアメリカの意図を疑うかもしれないという可能性が残っていたと思うんだけど、直接北京行つて周恩来、毛沢東と話したことによって、アメリカの意図にはそういうものが含まれていないということを徹底的にわからせ、それまで

できなかったような激しい北爆をできるようにしてしまった。

したがって、日本では北爆は幾らやっても軍事的に効果がないということだったんだけど、ぼくは少なくとも政治的に効果があつたというふうに思っている。だから北ベトナムも最終的には現実を認識して、アメリカと妥協せざるを得なかった。そうでなければ、キッシンジャーが停戦から二週間にしてハノイを訪れて、戦後の復興について話をするなんてことは考えられないですよ。

### 印象的な中国の変化

中嶋 ぼくは、いまのお二方の話に、別に異論はないんですが、ちょっと違った角度から見てみたいと思います。

いまおっしゃったように、ベトナム戦争は単なる内戦ではなくて、いわば国際的内戦だったと思うんですけれども、結局今回の和平協定までのプロセス、そしていま進みつつあるところのアメリカと北側との折衝を見ますと、やはり米中ソのかかわり合いの中でも特に中国の変化が印象的だと思うんですよ。

というのは、ちょうど文革の渦中に私が中国にいました時に、鄧小平批判の壁新聞をさ

がし出しましたが、それは一九六五年の二月から三月にかけて、北京の国際飯店で鄧小平を中心とする陰謀会議が開かれたという暴露なんです。そういうことを考えますと、六五年の二月の北爆の開始は、中国にとっても非常に大きな問題だったと思うんですよ。

しかしながら、私は文革がベトナム戦争との直接のかかわりで起こったということはないと思います。日本には一部、文化大革命とベトナム戦争というような関連を強調する人もありましたけれども、これはあくまでも内在的な問題であつて、そうではなかったことは明らかですね。しかしながら、文革開始前の段階で、北爆の開始にどう対処すべきかという点をめぐって中国の中にいろいろな問題が起こったことは疑いない。それがやはり何らかの意味で、文革に結びついていることも、疑いないわけです。

ところが、従来のパターンで考えれば、ベトナム戦争は最も毛沢東思想による世界革命戦略、あるいは中国のイデオロギーにとつてかっこうの材料であつて、したがってベトナムを支援することは文化大革命の国際版として、最大限の課題になり得たはずですけども、しかし必ずしも、そうではなかった。しか

も文革のあとに出てきたのは、周恩来外交であり、米中接近であり、そして日中復交であるということになると、従来の民族解放戦争ないしは民族解放開戦のチャンピオン中国という図式が、大きくくずれている。それがぼくにとつても非常に印象的です。そういう大きな変化は、アメリカにも、ソ連にもなかったと思うんです。ベトナム戦争が終わってみると、大きな変化が中国にあったということ、非常にぼくには印象的です。

アメリカの場合は一九六二年の例のキューバ危機、ああいうような、まさに外交のエッセンスともいふべき形で、ほんとに政策的にギリギリの選択をすることによって深刻な危機を回避した。しかしそのアメリカがやがてベトナムの泥沼に入っていくわけでしょう。それは、アメリカがアジアの問題を十分理解し得なかったということがあると思います。

一方ソ連を見ますと、中国との関係からしても、ソ連はかなり漁夫の利を占め、最近のアジアにおいても、意外にポイントをかきとってきたんじゃないかという気が私はするんです。

そういうふうにこの間の大国のいろいろな変化を見ると結局アジアの問題、この場



合、中国はアジアに入れて考えないほうがいいと思うわけで、そういうアジアの問題をいま大国がどれほどまでにかんんでいるかというところが、今後のインドシナ半島の将来にも大きくかわってくるんじゃないか、という印象を持つんです。

神谷 その点で、結局いまアジアの小国が大国の犠牲になる。あるいは犠牲にならないまでも、将棋でいえば歩になるような図式は、依然として解消してないと思うんですよ。もともとベトナムのトラブルのもと、アメリカのつまずきのもと、元来ルーズベルトは、フランス植民地主義がインドシナに復帰することは認めないという態度を戦時中ずっととりながら、結局西ヨーロッパを固めるためにはフランスの協力が何よりも必要であるという理由から、アジアでフランスがインドシナに帰ることを、認めてしまったというところに始まると思うんです。

同様に中国、ソ連のベトナム戦争に対する態度を見ても、たとえばベトナム人民の徹底抗戦に対して全面的に支援すると声明でいくら言っても、実際に被害をこうむるのはベトナム人で、ベトナム人こそいい面の皮だとも言える。

さつき蠟山さんは北ベトナムが心理的に孤立を意識させられたとおっしゃったけれども、それはまさにそのとおりで、つまり小国が大国のバワー・ポリテックスの犠牲になるという形で妥協が成立している。だから、さつき言ったような図式が解消したかという、依然としてまだ解消してないんじゃないかという気がするんですよ。ですから、これからあのインドシナ地域をめぐる情勢がどう展開するにしても、そんなにきれいごとにはなりっこないという感じがですね。

### アジアに対する無知

本誌 先ほど蠟山先生は、アメリカが結果的に誤認したとおっしゃったけれども、それはどういう意味ですか。

蠟山 これは非常に複雑な問題で、実はほくにも確信があるわけじゃないんです。

いわゆるドミノ・セオリーは一九五四年つまりフランスがディエンビエンフーで敗退する時期に出てきたアメリカの考え方でしょ。それは、いまここで共産勢力を食い止めないで、次々と隣接するアジア、また力の弱いアジア諸国が共産化されていくという考え方ですね。あとで修正されましたけれども、

一番最初の考え方は最後には日本もやられてしまいかもしれないという危機が示されていた。その考え方が間違っていたのか間違っていないかたかということは、歴史が一つの方向に行ってしまったからもうわからないわけですよ。つまり五〇年代の後半において、アメリカがあいいう形で介入していかなければそうなたか、あるいはならなかったかということはもう証明できないわけですよ。

だけど、ぼくはどっちかというと、やはり歴史の示すところでは、共産主義陣営は決して一枚岩ではない。だからハノイの背後に北京がいて、北京の背後にモスコイがいるという図式は、あとから考えてみれば誤りであった。そういう意味ではアメリカの最初の介入の動機というのは誤認ではなかったらうかと思うわけですね。

中嶋 ベトナム戦争はたしかに国際的內戦なんですけれども、他面ベトナムの中での民族解放運動という要素もあったわけですね。しかし今日のベトナムにおいてはその問題は、結局解決されていないわけでしょう。インドシナ全体あるいはアジア全体を考えても、結局ベトナム戦争でもって何にも解決してないと思うんですね。したがって再びそういうこ

とが起きる可能性もあるわけですね。

そういうことからいって、一番わりをくったのは、あれほどの時間をかけ、あれほどの悲惨な戦争をやりながら、問題の解決は全然できていないという、ベトナムの当事者だったということがいえる。

一方、それをめぐる大国は、いままでお話に出たように、いろいろ、それぞれ、思惑があったわけですが、その思惑にはアジアに対する無知があった。特にアメリカがつまずいていく過程を見ると、その原因はイデオロギーや政治理論以外の要因が非常に大きな割合を占めるアジアをつかみ得なかったところにもあるわけです。

たとえばキューバ危機について、最近よくは学生と一緒に勉強していますが、あれほどスマートな選択がケネディ、ラスクにできたということは、やはり相手がソ連であったからだと思うんです。それはソ連が核を持っていたということ以上に、いわば既成のイデオロギーで測ることのできる社会でしょう。だからこそアメリカもスマートな選択ができた。あるいはその背後には、ソ連もそういう意味では欧米人種であって、アジアに対する欧米人という前提もあったと思う。そう考え

てみますと、アジアは今までも大きな犠牲をこうむったわけだし、今後もこうむり続けるんじゃないかという気がするんです。

ただ、「第二のベトナムはごめんだ」という動きは強くなっていますし、それに、民族解放闘争をいう中国も、大国の論理で動くんだということは、だんだんアジアにも理解されるようになってきましたから、たとえばASEANに見られるような、新しい模索は出てくると思います……。

また、ベトナム戦争は北爆が開始されて急激にクローズアップされたけれども、六〇年代の初めは、むしろ問題はラオスだった。当時は南ベトナムにも解放戦線ができたということが、新聞の紙面にちょこっと出たぐらいであった。我々はラオスがどうなるかと思っていたわけです。

だから、今日でも、かりにラオスの和平協定ができて、ラオス問題の解決はむしろかしいと思うんですね。同じようなことが、カンボジアにもいえるような気がしますね。

### アメリカが負ければいいという願望

蠟山 ところでベトナム戦争に対する日本人の評価が、公平でないのは、イデオロギー

にもその一因はありましようが、むしろ日本人の中にアメリカが負ければいいという一種の願望があったんじゃないか。

神谷 それはそうですね。だから、日本の反米ナショナリズムを北ベトナムで実現しているようなところがあるんですよ。

蠟山 だから、ベトナム戦争をめぐるヨーロッパの評価と日本の評価は非常に大きく違っている。ヨーロッパはある意味では日本よりもアメリカにずうっと批判的ですよ。にもかかわらず、アメリカがつぶれてしまえばいいという願望はない。むしろアメリカがつぶれてしまったらたいへんだという意識があるわけでしょう。日本にはそれがありませんよ。

神谷 しかし、日本にあるんじゃないの。そこまではできないし、やる気もない。しかし、北ベトナムくらいだったら、適当にそろそろやるだろうという……。

蠟山 もっとずるいな、それは。

神谷 そこまで計算してやっているかどうかは知らないけれども、少なくともそれに近いようなことを無意識的にやっているんじゃないですか。そんな気がするんですよ。

蠟山 ぼくはなぜそういうことをいったかという、たとえば前のロンドンの戦略研究



所の所長をしてアラスデア・パカンが、あるカナダの大学でやった講演をみると、一番最初に、私はアメリカのベトナム政策を批判する。なぜならば、ベトナム戦争の結果アメリカがだめになってしまおうということは、われわれヨーロッパの人間にとってもゆゆしき大事であるからだ、とはっきり言っている。

そういうのはっきりした観点は、ぼくは日本人にはなかったような気がする。だから、アメリカが負け、北ベトナムが勝った。人民の力が勝ったという評価が出てくることになってしまふ。それはあまりにも全体を見ていないという印象を持つな。

### 大きかったホー・チ・ミンの死

神谷 だって、北ベトナムの犠牲者だって九七万と少なくとも公式にはいわれている。あるいはもっと多いかもしれない。うっかりすると、太平洋戦争の日本の犠牲者ぐらいいはば匹敵する。人口からいえば二〇分の一ですからね。

ぼくはその意味で去年の三月以来の北の攻勢というのは蛇足だったという気がするんですよ。つまり、そのためにアメリカの機雷封鎖を含む北爆再激化というジョンソンでもで

きなかったことをニクソンに平然とやらせてしまいい、しかも結局は、それをやってもやらなくても、似たようなところで妥協しなくてはならなかった。

それは非常に高い授業料であったといえ、それまでですけどね。

蠟山 だからぼくは、北ベトナムの誤算だというんですよ。

神谷 そういう誤算がなぜ出てきたかといえ、やはりぼくはホー・チ・ミンの死だと思ふな。ホー・チ・ミンがいなくなったために、ああいう現象が起きた。もしホー・チ・ミンがいたら、あそこまでやらなかったんじゃないかという気がしますね。

蠟山 だから、ホー・チ・ミンの死というのは、ほんとに大きいと思いますよ。

ところでホー・チ・ミンは中ソの確執を非常に心配していた。遺言でもそういうことを言っている。だけれども中ソの確執は、ホー・チ・ミンの心配や遺言程度では、いやすこ

ムは中ソから切り離されてしまったわけですからね。

中嶋 話がそれますが、ホー・チ・ミン死後の北京での周恩来、コスイギン会談について言えば、当時中国は中ソ国境でのコンフロンテーションにおびえ、それをなんとか回避しようと思った。

しかし一方、林彪を中心とする軍の勢力はどんどん拡大してくる。したがって周恩来は、九全大会の林彪型の対決路線を凍結させ、まさに民族国家の生死存亡の危機を救うために、急遽北京空港でコスイギンに会い、その年の暮れから国境会談にもっていくわけですね。

蠟山 だからホー・チ・ミンの遺言ということが、一つのきっかけにはなっているわけ

定期預金が20倍に生きる！

住友の 交通事故傷害保険をセット

**安全定期**

**住友銀行**

です。

中嶋 だけど、中国自身に会談をせざるを得ない事情はすであつたわけです。

### “こたえた”米中和解

神谷 しかしおそらく、北ベトナムが“この野郎”という気持を持ち始めているのは中国に対してではないかと思うんですよ。米中和解というのは、その意味で一番こたえたんじゃないですか。

蠟山 その意味で、ニクソンが北京に行つて、周恩来、毛沢東とにこやかに談笑して、握手しているところを、あれだけ金かけて宇宙中継したというのは、国内宣伝の目的もありでしょうが、やはり北ベトナムや解放戦線にも見せるという意味があつたと思います。それはちょうど、田中総理が北京に行つて周恩来とにこやかにやつてるときに、相模原戦車持ち出しを阻止のために寝ころがっていた社会党員、共産党員がガックリきた。それ以上に北ベトナムは、ガックリきたわけですよ。

ただ、それにしても一〇月の九項目合意というのは、まだ強気であり過ぎたんじゃないでしょうか。その後のアメリカの北爆強化が、

いいとは決して思いませんが、力のむき出しの行使ですからね。しかし、それがやっぱり効果があつたと思う。それでなければ、一〇月の九項目の合意から多少後退した形で二七日の合意が成立した理由が理解できない。

神谷 さつき北ベトナムの誤算という話が出ましたけれども、北ベトナムはもう一つ、アメリカの国内事情についても非常に大きな誤算をしたと思うんですね。つまり六〇年代末期、ティーチ・インはなやかなりしころのムードが、依然として生きている。したがつて、今度もあわよくば、マクガバンというような見方が去年の春以来の大攻勢の背後にあつたに違いない。そしてあわよくばそれをエスカレートさせようとした。ところが、これは全くの誤算であつたということだと思ひます。北ベトナムが、東西関係の変化や社会主義内部の変化を十分見抜けなかつたと同様に、アメリカの国内政治における変化を十分見抜けなかつたということは、そうだと思ひます。

### 離れる北京とハノイ

神谷 中嶋さん、北ベトナムと中国の今後をどう見ていらっしゃいますか。

中嶋 確かに北京で米中会談というのはなばなししいショーが行なわれてるときに、ハノイがガックリきたというのは、そのとおりで、そのどこへもやり場のないような気持ちの爆発が、つまり米中会談のリバーカッションが、去年の四月以来の大攻勢だろうとぼくは思ひます。

しかし、もう少し深いところでは、ハノイは北京がそういうことをするかもしれないということを、常に知っていた。つまりそれほどハノイは北京を信頼していなかつたんじゃないかと思ひます。それは、北京のベトナム戦争に対するかかわり方からも推察できたでしょうし、またハノイは文革や毛沢東個人崇拜にも批判的になっていましたね。すでに一九六七年ぐらゐあたりから、そんなようなニュアンスの論文が出ていた。だからそのころからハノイと北京の間には、一定のすき間がすでにできていた。

もっと逆上れば、私がいうまでもないことです。二千年来の中国人とベトナム人との関係があります。

そういうことからしますと、今後の北京とハノイの関係は、ますます離れるんじゃないかという気がぼくはするんですよ。そういう



意味では、いわばハノイが米中ソに等距離になるといい方は正しいと思う。特にベトナムの復興というような形で、アメリカがいわば常にニンジンを与えながら、経済合同委員会等を機能させていけば、ますますそういう形になってくる。それはアメリカにとつて大きな武器じゃないですか。たとえばいまの中国がベトナム復興にどれだけつくせるかといえ、経済的に考えてもかなりむずかしいですよ。

蠟山 ぼくは、ジョンソンの北爆停止声明の三カ月ぐらいあとに『自由』に原稿を書きましたが、そのとき、アメリカが北ベトナムの真意をほんとに理解して、本気で交渉することができるといふならば、戦争を終わらせることはできるんじゃないか。つまり北ベトナムを常識的比喩でいえばユーゴ化、チトー化ができるんじゃないか、という風なことを書きました。それは明らかに、北ベトナム—中国—ソビエトが一枚岩でないという認識に基づいている。もしその考え方が正しいとすれば、アメリカもあまりにも大きな犠牲を払ったし、北ベトナムだって、解放戦線だって、あまりにも払った犠牲が大き過ぎるような気がするな。あれだけ人間が死んじゃったんで

すからね。だからぼくは、この間、『朝日ジャーナル』に書いたんだけど、北ベトナムの強硬な意思に驚嘆はするけれども、あのナシヨナリズムをたたえるわけにいかない。

本誌 北爆はいくらやっても効果はないというような議論がありますが、私はそうではないのみならず、アメリカがその気になれば、皆殺しも可能だったと思っているんですけれども、そのあたりはどうお考えですか。

蠟山 やる気になればある程度までできるということは、今度の一月の北爆でわかったわけですけれども、ほんとの意味での皆殺しは無理だと思う。それはまわりから抑制されるだけではなしに、自分の内部からも抑制されますよ。

神谷 皆殺しというような、ことばはともかくとして、たとえば太平洋戦争とベトナム戦争との一番の差は、アメリカにとつて全力投球戦争であるか、全力投球できない戦争であるかということでしょう。ベトナム戦争については、終始一貫全力投球はできない、いわゆる限定戦争であつたわけですからね。そういう点からいえば、やはり一定以上はできない。そういう点も無視してやろうと思えばといういい方をすれば、それはできたかもしれない。

れない、ということになりましようけれどもね。

それはともかくそういう非常に大きな限界があり、同時に非常に大きな失敗もあるといううようなきわめて複雑かつ微妙な戦争に対して、どちら側の勝利であつたというような、オーバー・シンプリフケーションが行なわれているという点は、何としてもいみづかしいですね。

#### 過小評価されているチュウ政権

蠟山 しかし、日本人以外でも、たとえばフランスのラクチュールにしても、オーストラリアのバーチェットにしても、北ベトナムと接触の深かった人は、南ベトナムとアメリカを過小評価する傾向がありますね。たとえば去年の三月の大攻勢にしてもラクチュールは、チュウは一週間もたないような評論をしてました。

ぼくはアメリカを弁護するつもりは全くないんだけど、ベトナム化は失敗であつた。グエン・バン・チュウはかいらいであるから、アメリカがいなくなればすぐつぶれるんだ、という評価が正しいかどうかという問題がある。チュウ政権は単なるかいらい政権

などという言葉では片づけられないものを何か持っているような気がする。そうでなければ、解放戦線があれだけつくく停戦前にチューを除去することを要求しないはずですよ。アメリカがいなくなればたちまちつぶれるものであるならば、早くアメリカを撤退させるために妥協したほうがいいはずですよ。それができなかったというのは、ぼくは何かあったと思うんですよ。

中嶋 ヨーロッパにもそういう所はありましたが、特に、日本のベトナムに関する報道には、ある意味では中国報道以上に問題が多かったと思うんですね。だが、チュー政権だってもう六年ですか。

神谷 まれに見る長期政権ですよ。

蠟山 ベトナムの中で一番長いですよ。

中嶋 あれほど社会の不安定要因をかえてなお続いているということは、それなりに一種のリアリティがあるということだと思えます。

カンボジアなんかに対しても、そうでしたね。シアヌークがすぐ復讐するであろう、あるいはロン・ノル政権がたちまちくずれるだろうというような評論がずっとありました。しかしほくも行ったんですけれども、実際に

行ってみると非常に静かで、日本のマスコミの報道とずいぶん違っている。同じようにベトナム戦争においてもセンセーショナルなズムを競い過ぎたということは、いなめないと思うんですよ。

去年の秋、三年ぶりでサイゴンへ行きましたが、三年前と比べて、はるかにサイゴンの民衆の表情も明るく、チューに対する信頼感もできていくように思いました。もちろん内政的にはいろいろ難症をやっていますし、戒厳令もしいている。これは決して好ましいことじゃないかもしれない。しかしそういう中でもチュー以外にはないという気持ちもあり、とにかく一種の国づくりのムードのようなものができていくんですよ。

まず、キンシンジャーがかなりてこずったといわれているように、南ベトナムのアメリカに対するナショナルリズムも出てきている。また、たとえば三月、四月の攻勢以来、ものすごい数の難民が出た。難民のキャンプにも行ってみましたが、彼らを食べさせるだけだったたいへんな仕事です。これをだれがやるかという問題がある。

だから大国のパワー・ポリテックスの中で、北側もたいへんな犠牲を払いながら、とにかく

く挙国一致でやり通したという点で、民衆と指導者に一体感が生まれているとすれば、同じように南でも、不利な国際環境の中で、やはり民衆と指導者の間に一体感のようなものが徐々にできてきている。そういう意味では、南北ともにいわば大国の論理から自立したりアリティを持ってきているという気がします。

### 朝鮮半島型解決は可能か

中嶋 今度の和平協定をめぐって、結局、だんだん長い間に、選挙その他、いろいろな過程を通じて北が勝利しベトナムはいわば社会主義化し、アメリカはもう完全にギブ・アップしていくであろうというような議論がありますが、今申し上げたようなことや、さきほど出たキンシンジャーとハノイの間でおこなわれている経済復興をめぐる交渉等を見ると、ハノイ自身ももうベトナム全土支配に執着するよりも、やはり北ベトナムそのものの建設にとりくむという時代に入っていくんじゃないかと思うんです。

そうすると将来的には現在の朝鮮半島型、つまり相互承認から平和共存という解決の可能性も意外にあるのではないかと思います。



どうでしょうか。

神谷 ぼくはその点はつまりイエス・ア  
ン・ド・ノーなんですわ。

まずイエスの面をいいますと、人心を惑わすものの一つにいわゆるトラのしま、ヒュウの斑点、があると思うんですよ。つまり確かに斜線を引いてある部分からいえば、解放区は国土の相当部分ですね。しかし人口でみれば、逆にチュー政権の支配地域にチュー自身にいわせれば九三%、かなり割り引きしてみても八割五分以上が集まっている。つまり近代化、工業化に基づくノーマルな進展ではないけれども戦争に基づく、非常に奇妙で急速なアーバニゼーション、都市化が行なわれたわけですよ。カンボジアでもそうですよ。確かに、カンボジアの東北というのは、みんな斜線が塗ってあってシアヌークが支配しているということになっているわけですけども、それはほとんど人間がいなくて、人間がたかさんいるところはほとんどロン・ノル政府が、ともかくにも目下のところ押えている。そういうふうな地理的な観点だけから見て、いまいった点を見ないと、チューやロン・ノルは、吹けば飛ぶような存在だというふうに見ちゃう。それは明らかに誤りじゃ

ないだろうかという気がする。

今度はノーにあたる面をいいますと、ぼくはまだ少なくとも現時点で朝鮮スタイルになるということはい、切、切るだけの自信はない。つまりアメリカにとつて「名譽ある平和」は、少なくともニクソン政権の二期ぐらいは、チュー政府なり、あるいはその直系の後継者の政府が独自の存在としてとどまるということを目指していると思います。それについてはたしてキッシンジャーがちゃんとした見通しを持つていかどうかということすらもぼくはわからない。もしも、キッシンジャーが二年先の中間選挙を経て、四年全部つき合うという腹をきめているとすれば、かなりの見通しを持つていっていることだし、中間選挙のころにはやめるということであれば、四年間についてさえも必ずしも見通しはない、ということではないかと思うんですよ。

しかもかりに見通しがあつたとしても、ポスト・ニクソンの段階で南が独自の存在として定着していくということを、いまいち材料はないんじゃないですか。アメリカは、あと四年もてば「名譽ある平和」ということになるんで、その後、倒れても、これはアメリカの責任じゃなくて、その後の南ベトナムのやり

方が悪かったんだというふうにも説明できる。

蠟山 免責されちゃう。

神谷 ですからアメリカにすれば、短期的にはぜひとも守らなければいけないんだけど、中期的、長期的にはオーバーにいえばあとは野となれ山となれみたいなところもあるわけですよ。野となり山となって北ベトナムと一緒になつても、その統一ベトナムというのはそれほど親中反米じゃないという点に、いまや逆に安心感を持っているというようなところもまったくなくはない。そういう意味でちょっとノーの部分もあるんですよ。

蠟山 あなたのイエスの部分は確かにそれとおりだと思つてますよ。しかし同時に戦争の結果、人口希薄な農村地帯から避難民が大量に都市に集中したために、ものすごく不自然な社会構造の変化が起こつちやつたでしょう。しかしそれがまがりなりにも成立しているのは、アメリカのドルが、ベトナムの関税

訂正 本誌三月号の一七三頁上段十一行目、十二行目に於て「立正大学（菅野正實学長）」とあるのは、「菅公正實学長」の誤りですので、訂正するとともに、関係者に迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

編集部

予算の八〇％ぐらい入ってきていて、しかもその予算の九〇％が戦費に使われ、それでみんな食っていたからですね。

しかしもはや百万の軍隊を維持する必要はないし、維持もできない。それを武装解除し、生産人口に転化しなければならぬ。しかしそれをさせるだけの社会基盤はない。

そうなつてくると都市人口は、また再び農村に戻つていかなければいけない、という問題がありますよね。

神谷 確かにだからこそ中期的、長期的にはまだそれほど安定したとはいえないということなんです。

しかし半面たとえば中嶋さんなんかもごろんになったと思うんだけど、サイゴンの難民アパートでさえも、階段の横に階段になつていない部分がついています。これは上に住んでいる人がホンダのオートバイの上にあがる道なんですよ。すべての難民がそうだとはいいませんが、サイゴンでは難民アパートでさえも、そういう施設が最近二、三年の間のものにはほとんどついているということですよ。この生活レベルはいったん上がったらかなかなか落とせないと思う。だから蟻山さんがおっしゃるように、全部生産人口に転化し

て都市に定着することができないからといって、農村にカムバックして、もう一回ニッパヤシか何か知らないけれども、とにかくホンダ式生活の何分の一かの生活レベルに甘んじて、そこでがんばるというのも、これまた長続きするかどうかかわからないと思う。そういう問題があると思うんですよ。

蟻山 そうすると都市にいて、もし従来のような生活ができないとすると、今度はそこに社会不安が起きる可能性があるわけですね。

神谷 ですからまだクエスチョンマークの部分で、非常に多いという感じがするんですよ。

本誌 ニクソン・キッシンジャーの外交とは、こちらが国際政治というものを知らないせいもありましょうが、チラチラ見え隠れして握手したり、肩をたたいたりしつつ、どこか常にかわしさがつきまとうようなところがありますから、神谷先生のおっしゃったように、ポスト・ニクソンの段階で統一ベトナムもしくはそれに近い状態も、まったくオーパーとはいえないという気がします。そしてさつき話にでましたキッシンジャーとハノイの経済合同委員会にしても、ある意味では逆

にそういう場合への敷石と考えられなくはないんじゃないかという気がします。

### おとろえた社会主義の吸引力

中嶋 ぼくらはちょっと違う角度から、補足したいんですけども、アジアは考えてみると毛沢東型革命、あるいは民族解放戦線が勝利して社会主義へ移行するというパターンが最も成功しやすい土壌を持っている。にもかかわらず、いわばそういう形の革命は第二次大戦後の一時期の北朝鮮、北ベトナムを除いて起こっていないんですよ。それは単にアメリカの反共政策だけに帰すことのできないものがあると思う。やはり、一口にいえば社会主義そのものがうまくいっていない。しかも中ソ論争があり、文革がありで、社会主義そのものの吸引力が、おとろえている。ソ連にしても、東欧の西欧化を常に押えていかなければいけないというような現実がある。

だから確かに、キッシンジャーは何するかわからない、というようなところがあると思う。しかし、そのことを考慮に入れても、南ベトナムの人々は意外に賢明だし、とにかく、あれだけの戦争を戦ってきたわけだし北側も再び武力でということもできないわけだ



から、自由主義陣営からの離脱、社会主義化に對しては、そう簡単にくすねないものをもつと深いところにもつていると思う。アメリカがかりにギブ・アップしてしまつても、紆余曲折を経ながら十年あるいは十五年後には、南北朝鮮のような状態になつていくんじゃないかという気がします。しかも北ベトナムの經濟建設にはたいへんな困難がある。戦後の復興は長い間の戦争に比例しただけかかる。アメリカの經濟協力に對して非常にオープンだというのはそういう点があるわけでしょう。

### 復興援助をどう説明するか

神谷 アメリカの戦後復興に對する經濟援助を北ベトナム政府は国民にどう説明するんでしょうか。とにかく、いふなれば「鬼畜米國」でやつてきたわけでしょう。それから今度はもらおうというんでしょう。軍門に下つてついに向こうは、みつぎものを持つてきたというような説明をするんですかね。そういうことでなきや説明しようがないじゃない。

蠟山 そういう形でたてまえと本音というのはどんどん開いていく。しかしいつかはたてまえと本音を縮める方向へ動かさなくてはならない。そうなることやほり説明のしかたは

変わらざるを得なくなるでしょうね。

神谷 少なくとも当分は、そういう意味では何もいえない。それはちょうど中国が周恩来現実主義外交について、まとまつた説明をまだしていないのと同じです。そして何かいふとすれば、いまおつしやつたように本音とたてまえとのずれを、ますます大きくするようないふしか言えない。しかし少なくとも徐々には説明しなくちゃならない。これはたいへんな作業ですよ。

蠟山 北ベトナムでは自立更生の精神が旺盛だから、アメリカから資本が入つても、アメリカの影響を受けることはないという説明もあります。ただ、帝国主義をレーニン流に考えれば、帝国主義の財政援助は帝国主義そのものでないという解釈はできませんかね。

神谷 できないでしょう、資本輸出ですからね。

蠟山 『ニューズ・ウィーク』の編集長とレ・ドク・トの会見記では、アメリカはこれだけの破壊をした、だからそれを贖罪する義務があるという形で説明していますよね。

神谷 贖罪か、みつぎものの説明しかできない。

蠟山 もしも閉ざされた社会であるなら

ば、しばらくの間その論理を維持することはできますが、永久に維持することはできない。

中嶋 さきほどの朝鮮半島型解決というばくの見通しにも関係しますが、北ベトナムは、いままではいわば「鬼畜米國」というか反米ナショナリズムであつたことは明らかですが、マルクス・レーニン主義あるいは毛沢東思想でもないけれども、そういうイデオロギーが、はたして定着しているのかどうかという問題もあります。したがって戦争が終わつてナショナリズムの対象であるアメリカが歩み寄つてくれれば意外にオープンな方向にいく可能性もあるのではないか。しかもその背後にはソ連の影響力もあるわけですから、これ以上無理してゲリラ活動をやつて、全部ぶんどつてしまふということではなくて、むしろもつと開かれたナショナリズムの中で問題を処理していくというふうになつてくるのではないかという気もするんですけれども……。

蠟山 だから今度の停戦協定で一番割りを食つたのが解放戦線だつたと思います。だから停戦が実行されてからも北の態度と解放戦線の態度は違いますよね。停戦協定の発表されたあとのパリにおける記者会見でも北側は

かなり公式的な説明をしておりましたが、解放戦線のビン女史はもっとラディカルでした。あれにはほくは北に対する不満が含まれてるような気がします。

中嶋 そういう意味では米中会談によってハノイが受けたようなショックを、今度のキッシンジャーとハノイとの会談によって、解放戦線が受けているということもいえる。

蠟山 ですから、思想的にはたとえ同じ革命政権であっても、国家の政権を担当している立場と、これから政権を奪取しようとする立場は、結局は一緒にならないというふうにぼくは思いますね。

つまりこの前のインドシナ休戦では、非常に図式的にいわばモスコが北京に圧力をかけ、北京はハノイに圧力をかけるというような形で、停戦していたわけですよ。今度はそれが一段と複雑になったね。

### およびでない日本

本誌 ではこのあたりで日本のことについて少し話して下さい。

神谷 日本のことについてということですが、半年ぐらい前だったかもしれないけれども、ある人が「首相よハノイに飛べ」という

論文を書いたことがありますね。首相というのは田中さんのことですけれども。

しかし今度の停戦を見て日本というのはとてもお呼びじゃないわけですね。たとえば停戦監視団にだって入っていない。それはそれでいいんですが、一切兵隊は外へ出さないと決まっている国が、加わったくないわけですよ。停戦監視団に加わったくない国の首相がハノイに乗り込んで待ったをいうなんてばかも休み休みいってもらいたい。こういう愚論がいまだに、横行するとすれば、まことにもってゆゆしきことじゃないだろうかという気がします。つまりあれもするな、これもするなというのはいいんですけれども、いろいろしなければ、影響力も発言力もないということを実悟しなければいけない。前からたぶん三人ともいるんな機会に日本は経済大倒かもしれないけれども、国際政治上の大国、あるいは外交大国にはなれないということをいつてきたと思います。ハノイへ飛べという発想は外交大国になりたけいという発想でしょう。外交大国になりたければ海外派兵も何もかもやらなければいけないわけですよ。一方ではそういうことをやらないでいて、他方ばかりやれやれ、やりたいというのは形を変えたエ

コノミック・アニマルですよ。つまりなるべく少なく払ってなるべく多くを得ようという発想ですからね。私の記憶する限り三木さんが外務大臣だった六六、七年ごろには、日本はベトナム停戦に一役買ったという発想が、政府や外務省にもあったように思います。それ以来脈々と続いてきた。今度ベトナム停戦の場からはずされて表には出ないけれども、しまったとか、くやしいという気持はあるのではないでしょうか。しかしそれが実態で、つまり日本がやってほしいとも、また日本がやれるともどこも思っていないわけですよ。それを日本がやるべきだとか、よその国がやってほしいと思っているなどと思うとすれば、まったく間違いだということをおぼろげに感じたいですね。

### 手ぐすね引いて待つ私企業

蠟山 ぼくはそれは単にベトナムに限ったことではないと思う。たとえば今政府がやっている国連の安保理事会の常任理事国になりたけいという働きかけ、あれはぼくには全然わからない。これも大国として行動したいということでしょう。それがあかきり当然いまま問題になっているベトナム停戦についてもお



呼びじゃないのに一役買いたいという、非常に安直な期待も出てくる。

また現内閣において、アジア国際会議の構想があるでしょう。これもはっきりいってお呼びでないわけですよ。

逆にぼくはやっぱり政府も、もう少ししっかりしてもらわなければいかんと思う面もあるわけですよ。たとえばワルトハイム国連事務総長が日本へ来てベトナム復興に日本も力を貸せといってるでしょう。これはわりあい日本としてはありがたいことで、国連を通じてお金を出すということは、直接お金を出すことよりもけっこうなんです。

だけどそれよりも早く個々の私企業が手ぐすね引いている。彼らにしてみれば戦後復興に関与すれば将来商業ベースで大きな利益が生まれるという発想でしょう。だからしのぎを削ってヘノイへ入っていくわけですよ。彼らのほうは絶対に政府より早いんだな。熱心さが違うわけですよ。彼らにとっては生きるか死ぬかなんだから……。

しかしこれをうまくコントロールできないと、タイで起こるような問題が、二年、三年あるいは五年後にベトナムでも発生するに違いない。これだけははっきりいえるんじゃないかと思うんです。

けれども残念ながら、わが国の政府の力では、もうちょっとそれをコントロールできないんじゃないかな。

中嶋 もうあんまりつけ加えることはないけれども、政府がそういう形ですぐアジア国際会議とか何とかいい出すのはアメリカをまずかせたアジアの複雑でこみ入った民族的、人種的、社会的背景についての認識がまだまだ足りないからだと思う。だからいわば国際政治の論理でアジアに介入し、アジアを動かそうということになるわけですよ。しかもその背後には米中接近による緊張緩和という、かっこうの材料もある。しかしながらそもそもその緊張緩和、デタントという概念はこれは私がいうまでもないことですが一九六〇年代の後半ぐらいからヨーロッパで使われた概念で、ヨーロッパでそれにはそれなりのプロセスがあったわけですね。しかし現在のアジアの状況はそれとは違うわけですよ。

ベトナムに対しては、私はいろいろな意味でナシヨナリズムが大きな役割をはたしているわけですから、あまりイデオロギー的なファクターばかりで見ないほうがいいんじゃないかと思います。中国の場合と違って南との

外交関係を保ったままでも、北側と外交関係をもち得るようなことを『ニヤンゼン』の編集長がいうわけですからね。いま申しましたようなことをはじめとして、もう少しアジアを現実的に見ていく必要があるのではないかなという気がします。

蠟山 現実主義的認識を行なうと日本の行動もパワー・ポリティカルにならないければ、いけないかのように一般に思われていて、だから一方では現実的の分析もしないウィッシュフル・シンキングだけが横行するという奇妙な状況があります。

しかしそういう意識では認識と行動はやはり違うので、むしろ日本のおかれている現実をリアルに認識すれば、とてもそんなパワー・ポリティカルな行動は、出てこないわけですね。

神谷 日本にはパワーがないわけでしょう。パワーがないのにパワー・ポリテクスできないよな。(笑)

本誌 それではこのあたりで終わりたいと思います。三先生のご意見にはそれぞれ微妙なニュアンスのちがいはあるように思いますが、最初に申し上げた私達の意図は十分に達成されたと思います。

# 自由の眼



## オソマツな「防衛力の限界」論議

去る二月一日増原防衛庁長官が衆議院予算委員会に示した「平和時の防衛力」に関する防衛庁見解は、十二日、田中首相の撤回発言であっさり幕、ということになった。国民不在の政争は今に始まったことではないが、こんなに国民をバカにした話も珍しい。米国のレアー前国防長官は、その「最終報告」のなかで、「議会は、超党派で国防問題と取り組んできたそのやり方を誇るべきだ」といつているが、日本の国会にもこんなお世辞のせめて半分でも呈上できたら、と思ったのは筆者ひとりではあるまい。

問題の発端は、昨年十月の国防会議議員懇談会で、田中首相が「この際、平和時における防衛力の限界を示すよう検討してほしい」と指示したことから始まった。三次防、四次防と防衛力整備が進む中で「自衛隊はどこまでいったら満足するのだろうか」という国民の素朴な疑問に対して、政府はこれまで、カネの面から、「GNPのパーセント以内」

「社会保障関係費のほぼ半分くらい」というふうに、主として国家の資源配分という政治的側面から説明してきたのだが、成長を続ける経済力に、スライドさせるというやり方では、国民の不安はなくならない。そこへ、一昨年以来、四次防先取り以下一連の防衛庁批判の高まる中で、田中首相の指示となったわけである。

増原長官は、指示を受けて早速庁内での作業を命じ、国会でも「年内に数字で示す」と約束した。だが、この、限界を数字で示す、ということ自体がもともとオカシかった。自衛力の量や質は、本来対象国との関係で相対的にきめられるべき性格のもので、周辺諸国の力や国際情勢の見通し、技術の進歩、軍備管理のなりゆき、わが国の外交方針などさまざまな要素を前提にしてはじめて割り出されるものなのである。しかも、当方はこれ以上は決して持ちません、と相手に手の内を見せしてしまったのでは、抑止も何もあったもので